

神戸大は23日、小児期に発症した腎臓病「難治性ネフローゼ症候群」に対し、抗がん剤として使用されている薬「リツキシマブ」を使うと高い効果があることが分かった、と発表した。既に臨床試験（治験）で同症候群の再発を抑える効果を確認し、製薬会社が厚生労働省にリツキシマブの適応拡大を承認するよう申請中。成果は同日付の英医学誌ランセット電子版に掲載された。（金井恒幸）

## 小児ネフローゼに新治療法



飯島一誠教授

腎臓は血液をろ過して尿を生成。ネフローゼ症候群は腎臓の障害でタンパク質が尿中に漏れ出て、顔や手足にむくみが生じる。成人も発症するが、小児では慢性腎臓病のうち最も高頻度で、国内で年間約千人が発症する。

ステロイドの投与で尿中のタンパク質がなくなる人が多いが、減量したり中止したりすると、患者の半数が再発を繰り返す。ステロイドの長期投与は低身長などの副作用を起す恐れもある。免疫抑制剤を代わりに使う試みもあるが、効果

# 抗がん剤で再発抑制

## 神戸大など確認 副作用軽減に期待

がないケースがあった。

神戸大などのグループは2008年、神戸大医学部付属病院や兵庫県立こども病院（神戸市須磨区）など全国9施設で治験を始め、ステロイド治療後、24人の患者にリツキシマブを投与。投与しなかった患者と比べると、再発を抑えられる期間が倍以上に延び、再発率も大幅に下がった。厚生労働省への承認申請は今年秋ごろにも結果が出る見通し。

神戸大大学院医学研究科の飯島一誠教授は「ステロイドや免疫抑制剤の長期投与を減らし、副作用をできるだけ抑えることに役立つと期待している」と話す。